

来年のために今から準備！ 稲わらの腐熟促進と土づくりで気候変動に強いイネづくりを！

やまがた温暖化対応米づくり日本一運動本部

◎今から稲わらの腐熟を進めて、来年の初期生育を確保しましょう！

代かき後に稲わらの分解が急激に進むと、土壌の異常還元（ワキ）等でイネの初期生育が抑制されてしまいます。**なるべく気温が高いうちに（10月中に）、秋耕や稲わら腐熟促進資材を散布して、稲わらの分解を進めましょう。**

秋耕で根の重さが1.7倍に！

○耕うん作業が可能な場合（田面が乾いている場合）

秋耕（秋浅耕）	約5cm程度の深さで耕うんし、稲わらと土壌を混和させる ただし、排水不良の圃場では、春作業に影響する恐れあり
---------	---



図1 秋耕の効果

○耕うん作業が困難な場合（田面が軟弱な場合）

稲わら腐熟促進資材の散布 〔石灰窒素 微生物資材〕	石灰窒素の散布量：「はえぬき」10～20kg/10a 「つや姫」「雪若丸」10kg/10a ※連用等で生育が過剰になっている場合は、石灰窒素の施用を控えるか、基肥や追肥の施用量を減らす ※地力の高い圃場や全量基肥施肥体系で「つや姫」を栽培する場合は、石灰窒素でなく微生物資材を散布
------------------------------	---

秋耕と稲わら腐熟促進資材を組み合わせた場合は、さらに高い効果が期待できます

◎土づくりで、気候変動に強いイネの土台づくりを！

来年の作付けに向け、積極的に堆肥やケイ酸資材を散布し、土づくりを行いましょう。土づくりを継続することで、登熟期の高温の悪影響を軽減する等の効果が期待できます（図2、3）。

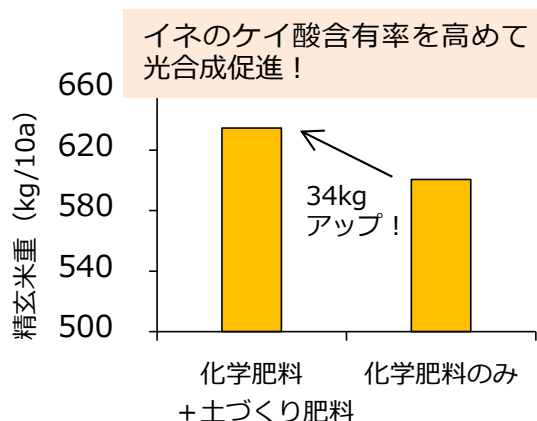


図2 土づくり肥料施用による収量の増加
土づくり肥料：ようりん30kg/10a、
ケイカル150kg/10aを毎年施用
H10～R1の精玄米重平均「はえぬき」農総研

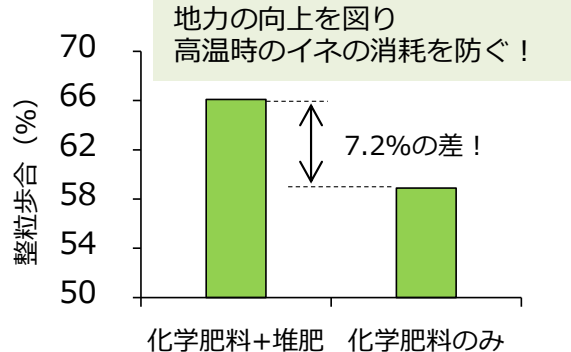


図3 堆肥施用による品質低下の抑制（令和5年）
堆肥を毎年1t/10a施用 「はえぬき」農総研

農作業事故に十分注意してください！